

『就実論叢』第49号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2020年2月29日 発行

# 日本語における動詞・形容詞の否定のかたちについて

－日本語教師のための日本語文法をもとめて－

**On Inflection Forms of the Negative Verb and Adjective in Japanese**

中 崎 崇  
城 田 俊

# 日本語における動詞・形容詞の否定のかたちについて

－日本語教師のための日本語文法をもとめて－

On Inflection Forms of the Negative Verb and Adjective in Japanese

中 崎 崇 (表現文化学科)

NAKAZAKI Takashi

城 田 俊 (獨協大学)

SHIROTA Shun

キーワード：日本語文法、動詞、形容詞、否定、否定形、語形、語形変化、活用

## 0. はじめに

日本語教育を行うためには、非日本語母語話者にも日本語母語話者にもわかりやすい文法を新しく組み上げる必要がある。本稿は、中崎・城田(2017a)(2017b)(2018a)(2018b)(2019)に引き続き、日本語教育<sup>1</sup>のための新しい日本語文法教科書の作成を目指して、動詞及び形容詞の否定のかたちについて、単語として文中においてどのようなかたちをもち、どのような意味をもって、どのようにつくられるのかといったことについて検討するものである。以下に記すことは、もちろん試論にすぎない。

## 1. 動詞の否定のかたち

動詞の語尾変化の体系については中崎・城田(2018b)で検討を行っているが、肯定のかたちについては動詞の語尾変化で扱われる。例えば、言い切る形(完結形)の叙述するかたち(叙述形)の非過去形(辞書形・ル形)の肯定のかたちは、子音語幹動詞であれば、語幹に -u、母音語幹動詞であれば、語幹に -ru といった語尾助辞をつけることにより形成される。

(1) I. 子音語幹動詞：書ク kak-u

II. 母音語幹動詞：食ベル tabe-ru、見ル mi-ru

III. クル、スル：来ル ku-ru、スル su-ru

これに対して、否定のかたちについては、語尾変化ではなく、動詞の語幹に語幹助辞<sup>2</sup>をつけ拡大することによってつくられる。中崎・城田(2017b)で触れているが語幹助辞には、使役語幹をつくる・ase(-ru) / ・sase(-ru)：書カセル kak・ase(-ru) / 食べサセル tabe・sase(-ru)、受身語幹をつくる・are(-ru) / ・rare(-ru)：書カレル kak・are(-ru) / 食べ

ラレル tabe・rare(-ru)、可能語幹をつくる・e(-ru) / ・[ra] re(-ru) : 書ケル kak・e(-ru) / 食べ [ラ] レル tabe・[ra] re(-ru) 等がある。否定のかたちは、動詞の語幹に語幹助辞・ana(-i) / ・na(-i)<sup>3</sup>をつけ拡大することによってつくられる。

## 2. 否定(ナイ)語幹

他の語幹助辞と同様に、否定語幹を形成する語幹助辞についても・ana(-i) / ・na(-i)の2類が存在する。それぞれ動詞の種類に応じた語幹助辞をつけることで形成される。具体的には、I. 子音語幹にはana(-i)、II. 母音語幹にはna(-i)をつける。III. クル、スル<sup>4</sup>については、否定語幹形成にあたって来ルの語幹末母音はo:コナ(イ)ko・na(-i)となり<sup>5</sup>、スルの語幹末母音はi:シナ(イ)si・na(-i)となり、それぞれna(-i)をつける。

- (2) I. 子音語幹動詞: 書カナ(イ)kak・ana(-i)
- II. 母音語幹動詞: 食ベナ(イ)tabe・na(-i)、見ナ(イ)mi・na(-i)
- III. クル、スル : 来ナ(イ)ko・na(-i)、シナ(イ)si・na(-i)

存在動詞アルの否定のかたちは、アラナ(イ)ar・ana(-i)ではなく、独立する形容詞であるナ(イ)na-iが用いられる。また、くだけた場面で、I. の子音語幹動詞のうち分カルのようなr語幹のものは、分カラナ(イ)wakar・ana(-i)が分カンナ(イ)wakan・na(-i)となり得る。

否定語幹という名は内容から与えられた文法上の語幹名であり、外容からはナイ語幹という名を与え得る。必要に応じ否定(ナイ)語幹と表記することがある。このナ(イ)・ana(-i) / ・na(-i)は語幹助辞であるが、このような語幹助辞による語幹の文法的拡大を語幹変化と呼ぶ。ナ(イ)による語幹変化は動詞語幹をイ形容詞語幹に変容させ、この語幹はイ形容詞の語尾をとって、3. で示すように再び語尾変化を行う。

語幹助辞には動詞性の語幹助辞と形容詞性の語幹とがある。1. で示したヴォイスの形態をつくる・ase(-ru) / ・sase(-ru)、・are(-ru) / ・rare(-ru)、・e(-ru) / ・[ra] re(-ru)は動詞性語幹の助辞であり、動詞性語幹助辞は動詞の語尾助辞をとって、書カセロkak・ase-ro、書カセヨウkak・ase-yoo、書カセレバkak・ase-rebaのように語尾変化を行う。すでに記した通り・ana(-i) / ・na(-i)はイ形容詞性語幹助辞であるため、イ形容詞の語尾助辞をとって語尾変化を行う。

## 3. 否定(ナイ)語幹の語尾変化

否定(ナイ)語幹は2. で述べたように、イ形容詞性の語幹であるため、イ形容詞(肯定のかたち)<sup>6</sup>と同じ語尾変化を行う。

具体的には、言い切ることができ、単独で完結している語形であるI「完結形」、通常は

終結することができず続ける語形であるⅡ「接続形」に大別される。また肯定のかたちと同様に、文法上の用法が特定されておらず（特定の用法をもたない語形、つまり不特定な語形）、非常に広汎な機能を持ち、日本語の形容詞の「原形」とも目されるかたちであるⅢ「汎用形」（連用形と伝統的に呼ばれる語形）も認められる。

さらに、Ⅰ「完結形」は、動詞でありながら、かたちの上で形容詞となるため、呼び掛けるかたち（意志・勧誘形）・命令形をつくり得ないため、否定のかたちもⅠ「叙述形」のみを有する。「叙述形」は、【テンス（時制）】（文が表す出来事の発話時との時間的な前後関係を表し分け）により、kak・ana-i「書かない」のような①「非過去形（ナイ形）」と kak・ana-katta「書かなかった」のような②「過去形（ナカッタ形）」とに分かたれる。①「非過去形（ナイ）」は、発話時よりも先である過去といったときを表さない、つまり発話時よりも同時（現在）か後（未来）といったときを表しうる語形である。「明日太郎は日記を書かない」であれば、発話時よりも同時（現在）か後（未来）といったときにおいて、「太郎が日記を書く」といった事態が存在しない、成立しないことを表す。ただし、通常、発話時と同時を表す場合（つまり発話時時点で事態が未成立であることを表す場合）は、kaite-i・na(-i)「書いていない」といった中止形による結合形の否定のかたちを用いる。②「過去形（ナカッタ形）」は、文字通り発話時よりも先である過去といったときを表す語形である。「昨日太郎は日記を書かなかった」であれば、発話時よりも先である過去といったときにおいて、「太郎が日記を書く」といった事態が成立しなかったことを表す。

- Ⅰ. 完結形 1) 叙述形 { ①非過去形（ナイ形）  
②過去形（ナカッタ形）

Ⅱ「接続形」と同様に、名詞に接続する2)「連体接続形」と、基本的に名詞以外のものに接続するかたちである3)「連用接続形」に分かたれる。接続形は、さらに、文中での働き（いわゆる統合的 syntagmatic な意味・機能）によっていくつかの形に分けられる。

- Ⅱ. 接続形 { 2) 連体接続形（連体形）  
3) 連用接続形

「連体形」については、動詞の肯定のかたちには、主節が表すとき（主節時）を基準として、動詞が表す事柄の継起順序を表し分ける【順序】といった文法的意味を表し分ける語形が存在する。主節があらわすときよりも同時か後といったときを表す kaku「書く」といった「非以前形」と主節時よりも先であるといったときを表す kaita「書いた」といった「以前形」である。動詞では「以前形」は「叙述形」の「過去形」と、「非以前形」は「非過去形」と、語形とその作り方は同じである。

動詞の否定のかたちでも、名詞に接続する際、「ケーキを食べない人」のような「叙述形」の非過去形（ナイ形）と「模擬試験を受けなかった人」のような「叙述形」の過去形（ナカタ形）と同じ作り方をする2種が認められる。

「明日模擬試験を受けなかった人は、先生に申し出て下さい」といった場合、発話時よりも先である過去といったときにおいて従属節の否定の前の部分（明日模擬試験を受ける）が成立しなかったことを表すわけではない。この場合は、主節時（先生に申し出るといった事柄がなりたつとき）よりも先に、従属節の否定の前の部分（明日模擬試験を受ける）が成立しなかったことを表している。このようにナカタ形の場合、動詞が表す事柄の継起順序を表す場合があるといえる。

「昨日食後のケーキを食べない人は、帰った」といった発話が容認される場合は、発話時よりも後である未来といったときにおいて従属節の否定の前の部分（ケーキを食べる）が成立しないことを表すわけではない。しかし、主節時（帰るといった事柄がなりたつとき）よりも後に、従属節の否定の前の部分（食後のケーキを食べる）が成立しなくなることを必ず表すわけでもない。この場合、ナイ形は動詞が表す事柄の継起順序を表しているとは言いがたい。

このように、事態成立の順序を表し分ける肯定のかたちの場合と異なり、事態の非成立を表す動詞の否定のかたちの場合、ナイ形とナカタ形の対立が明確に【順序】といった文法的意味を表し分けているとは言いがたい。よって本稿では2)「連体形接続（連体形）」において、動詞の肯定のかたちと同様の【順序】といった文法的意味を表し分ける「非以前形」と「以前形」の2種をひとまず認めないが、便宜的に①非過去形と同形の連体形を③「ナイ連体形」と②過去形と同形の連体形を④「ナカタ連体形」と呼称し語形上の区別はしておく。

次に「連用接続形」については、動詞の肯定のかたちと同様の語形が認められる。文を途中でとめる（従属節の述語となるなど）かたちである⑤中止形（ナクテ形）、後ろにつづく事態（主節でしめされる事態）が成り立つための条件をあらわすかたちである⑥条件形（ナケレバ形）、当該の事態が、主節の事態の成立の前提となる事態であることをしめす（当該の事態が成立しないことで、主節の事態が成り立つことをしめす）かたちである⑦前提形（ナカッタラ形）、当該の事態が成立しないことが、主節の事態の成立の条件となりえないことをあらわすかたちである⑧逆接形（ナクタッテ形）、いくつかの選択肢の中から任意に選んだ事例であることをしめすかたちである⑨例示形（ナカッタリ形）、以上の5つが接続形のかたちである。

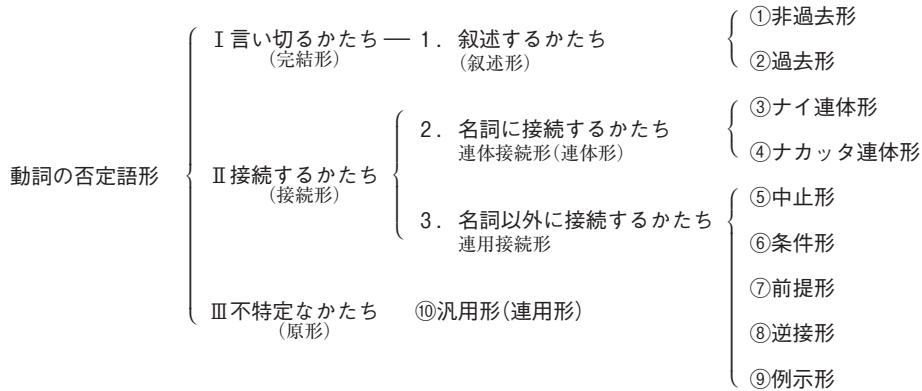
以下に、接続形の例文を示しておく。

(3) 大学に行かなくて、ゼミの先生に会えなかった。(中止形)

(4) 点数が入らなければ、紅組の勝利となる。(条件形)

- (5) 客が来なかつたら、休憩にします。(前提形)  
 (6) 一生懸命働かなかつたって、なんとか暮らしていける。(逆接形)  
 (7) 太郎は、1日誰とも会わなかつたり、話さなかつたりすることがあった。(例示形)

以上を表示すると次のようになる。



#### 4. 各語尾形のつくり方

先に述べたように、ナ (イ)・ana(-i) / ・na(-i) は形容詞性の語幹であり、否定のかたちは、否定語幹にイ形容詞の語尾をとって語尾活用を行う。否定語幹は母音で終わるため、イ形容詞の語尾形と同じく、動詞の種類に応じた語尾助辞をつけるといったことがない。

以下、動詞の否定語形とつくり方について、語形ごとにみていくことにする。

##### 4.1. 非過去形 (ナイ形)・ナイ連体形

非過去形 (ナイ形)・ナイ連体形は、否定語幹に -i をつけ形成される。

- (8) Iグループ：書カナイ kak・ana-i  
 IIグループ：食べナイ tabe・na-i、見ナイ mi・na-i  
 IIIグループ：シナイ si・na-i、来ナイ ko・na-i

2. で分カルのような r 語幹のものは、分カラナ (イ) wakar・ana(-i) が分カンナ (イ) wakan・na(-i) となり得ると述べたが、さらに分カンネー wakan・ne-e となり得る。このナイがネーと発音されるのは、書カネー kak・ane-e、食べネー tabe・ne-e、見ネー mi・ne-e、シネー si・ne-ei、来ネー ko・ne-e のように r 語幹に限らない。これは、男性の粗い話しことばでみられる。

非過去形というのは内容上の名付けである。外容からはナイ形と呼ぶことにする。ナイ形

と言えば語尾形（非過去形）のことであり、否定（ナイ）語幹と混同してはならない。日本語教育では、ナイ形が否定（ナイ）語幹の意味で用いられたり、否定語幹の非過去形の意味で用いられたりすることがあるが、両者は、用語上も厳密に区別されることが望ましい。

#### 4.2. 過去形（ナカッタ形）・ナカッタ連体形

過去形（ナカッタ形）・ナカッタ連体形は、否定語幹に *-katta* をつけ形成される

- (9) I グループ：書カナカッタ *kak*・*ana-katta*  
II グループ：食バナカッタ *tabe*・*na-katta*、見ナカッタ *mi*・*na-katta*  
III グループ：シナカッタ *si*・*na-katta*、来ナカッタ *ko*・*na-katta*

このカッタ *-katta* のカッ *-kat* は、イ形容詞性語幹に、過去形をつくる *ta* を接合させるために出現する結合要素（語幹と助辞を結合させる要素）と考える。寒カッタ *samu-katta* のようにイ形容詞のカッタ形にもこの要素は出現する。

#### 4.3. 中止形（ナクテ形）

中止形（ナクテ形）は、否定語幹に *-kute* をつけ形成される。

- (10) I グループ：書カナクテ *kak*・*ana-kute*  
II グループ：食バナクテ *tabe*・*na-kute*、見ナクテ *mi*・*na-kute*  
III グループ：シナクテ *si*・*na-kute*、来ナクテ *ko*・*na-kute*

このクテ *-kute* のク *-ku* も、過去形の *-kat* と同様に、イ形容詞性語幹に、中止形をつくる *te* を接合させる時に出現する結合要素である。寒クテ *samu-kute* のようにイ形容詞のクテ形にもこの要素は出現する。

#### 4.4. 条件形（ナケレバ形）

条件形（ナケレバ形）は、否定語幹に *-kereba* をつけ形成される。

- (11) I グループ：書カナケレバ *kak*・*ana-kereba*  
II グループ：食バナケレバ *tabe*・*na-kereba*、見ナケレバ *mi*・*na-kereba*  
III グループ：シナケレバ *si*・*na-kereba*、来ナケレバ *ko*・*na-kereba*

このケレバ *kereba* のケ *-ker* も、過去形の *-kat*、中止形の *-ku* と同様に、イ形容詞性語幹に、条件形をつくる *eba* を接合させるために出現する結合要素である。寒ケレバ *samu-*

kereba のようにイ形容詞のケレバ形にも現れる。

#### 4.5. 前提形 (ナカッタ形)

前提形 (ナカッタ形) は、否定語幹にカッタラ -kattara をつけ形成される。

- (12) I グループ：書カナカッタラ kak・ana-kattara  
II グループ：食ベナカッタラ tabe・na-kattara、  
見ナカッタラ mi・na-kattara  
III グループ：シナカッタラ si・na-kattara、来ナカッタラ ko・na-kattara

このカッタラ kattara のカッ-kat も、過去形の -kat と同じ、イ形容詞性語幹に、前提形をつくるタラ tara を接合させるために出現する結合要素である。寒カッタラ samu-kattara のようにイ形容詞のカッタラ形にも現れる。

#### 4.6. 逆接形 (ナクタッテ形)

逆接形 (ナクタッテ形) は、否定語幹にクタッテ -kutatte をつけ形成される。

- (13) I グループ：書カナクタッテ kak・ana-kutate  
II グループ：食ベナクタッテ tabe・na-kutate、  
見ナクタッテ mi・na-kutate  
III グループ：シナクタッテ si・na-kutate、来ナクタッテ ko・na-kutate

このクタッテ kutatte のク -ku も、中止形の -ku と同じ、イ形容詞性語幹に、逆接形をつくるタッテ tatte を接合させるために出現する結合要素である。寒クタッテ samu-kutate のようにイ形容詞のクタッテ形にも現れる。

#### 4.7. 例示形 (ナカッタリ形)

例示形 (ナカッタリ形) は、否定語幹にカッタリ kattari をつけ形成される。

- (14) I グループ：書カナカッタリ kak・ana-kattari  
II グループ：食ベナカッタリ tabe・na-kattari、  
見ナカッタリ mi・na-kattari  
III グループ：シナカッタリ si・na-kattari、来ナカッタリ ko・na-kattari

このカッタリ kattari のカッ-kat も、過去形の -kat と同じ、イ形容詞性語幹に、例示形



をつくるタリ tari を接合させるために出現する結合要素である。寒カッタリ samu-kattari のようにイ形容詞のカッタリ形にも現れる。

#### 4. 8. 汎用形 (連用形・ナク形)

汎用形 (連用形・ナク形) は、否定語幹にク -ku をつける。

(15) I グループ: 書カナク kak · ana-ku  $\phi$

II グループ: 食バナク tabe · na-ku  $\phi$ 、見ナク mi · na-ku  $\phi$

III グループ: シナク si · na-ku  $\phi$ 、来ナク ko · na-ku  $\phi$

本稿では、なにもつかないといったあり方の助辞を認める。tabe-「食べ」のような母音語幹動詞の汎用形 (連用形) にみられる助辞は、なにもつかないといったあり方の助辞、つまり - $\phi$  (ゼロ) tabe-  $\phi$  とった語尾助辞がつけられると考える。kas-u「貸す」のような子音語幹動詞では、kas-i  $\phi$  となり、語幹に -i  $\phi$  をつけ形成され、-i は子音語幹に語尾の本体  $\phi$  を結びつける役をはたす結合母音と考える。

上記のように考えると、この -ku は、汎用形 (連用形) をつくる語尾  $\phi$  (ゼロ) をイ形容詞性語幹に接合させるために出現する結合要素であると考えられる。寒ク samu-ku  $\phi$  のようにイ形容詞のク形にも現れる。

#### 5. ナカロウ形

イ形容詞には、動詞のヨウ形 にかたちの上で対応する「寒カロウ」 samu-karoo、といった形態があったが、動詞の否定語幹のカロウ形、つまり、ナカロウ形といった形態があるにはある。

(16) 書カナカロウ kak · ana-karoo

ナカロウ形は、否定語幹に -karoo を接合させてつくられる。カロウの -kar は、イ形容詞性語幹に -oo を接合させるために出現する結合要素である。ナカロウ形もイ形容詞のカロウ形に応じ推量の意味で用いられることがある。

(17) あんな社会的地位の高い人物が密告の手紙をただちには書かなかろうと希望的推測をしていたが…

ナカロウ形による推量は、文体的に著しい制限があり、その使用は限られる。否定の意味の推量は通常、否定語幹の非過去形 (ナイ形)、過去形 (ナカッタ形) に文尾助辞である「ダ

ロウ」をつけて表される。現在あまり用いられないかたちなので、動詞の否定のかたちの語尾変化表にはかかげないことにする。

(18) 書カナイダロウ kak・ana-i+daroo

書カナカッタダロウ kak・ana-katta+daroo

動詞のヨウ形やイ形容詞のカロウ形と同じで、推量的意味は、「ダロウ」が表す事態の成立（ナカロウの場合は事態の非存在や非成立）を思考や想像で捉えたものとして表すといったものに近似する。（6.2.1. で推量的意味については再度触れる）

## 6. 動詞（肯定）語幹から直接つくられる否定の語尾形

動詞の否定のかたちは、否定語幹の語尾変化によってつくられるかたちで尽くされるわけではない。動詞の語幹から、（つまり肯定語幹から）否定の意味を内包する特別の語尾助辞によって直接つくられるものもある。その代表は、意志形（マイ形）と命令形（ナ形）である。意志や命令を示すかたちは形容詞には存在せず、イ形容詞性語幹助辞によって形成される否定語幹からは意志形・命令形は構造上つくり得ないからである。以上でわかるように、否定の意味を内包する語尾助辞によって動詞語幹から直接形成されるかたちは、動詞でありながら、形容詞性の形態をとる否定語幹の形態上の限定（ないし矛盾）を乗り越えるためにまずあると理解される。

これ以外に、非過去形、中止形、条件形、汎用形（連用形）も、動詞の語幹から語尾助辞の助けを借りて、形成される。かくして、この4形では、否定語幹からつくられる否定の語尾形と、動詞の肯定語幹からつくられる否定の語尾形とが、併存することになる。本稿では、その競合とすみわけについては詳しくは触れず、かたちを確認しつつ、その文体面での問題点のみを触れることにする。

### 6.1. 非過去形（ヌ形）

動詞の語尾形は動詞の種類に応じた語尾助辞をつけることで形成される。ナイ形に競合する、否定の語尾形の非過去形（ヌ形）は、Ⅰ. 子音語幹動詞には -an(u)、Ⅱ. 母音語幹動詞には -n(u) をつけ形成する。Ⅲグループの動詞は、ヌ形形成に当たっては、「来ル」の語幹末母音は o、「スル」の語幹末母音は e となり、-n(u) がつくことになる。

(19) Ⅰグループ：書カヌ（ン） kak-an(u)

Ⅱグループ：タベヌ（ン） tabe-n(u)、見ヌ（ン） mi-n(u)

Ⅲグループ：来ヌ（ン） ko-n(u)、セヌ（ン） se-n(u)

書カヌー書カンのように、ヌ形のヌ nu はン n と交替できるが、現在、どちらも使用は活発ではない。使用された場合はヌ nu は文語的であり、ン n の方は男性語としてみられる。

ナイ形とヌ（ン）形は文体的に競合する。ナイ形が文体的には中立的であるのに対し、ヌ形は書きことばで用いられると文語的であり、話しことばで（ンのかたちで）用いられると男性語的で（横柄な）年長者的なことばづかいとなる。いずれにしてもヌ形は、出現頻度は低い。また、ヌ（ン）形は成句・慣用句の中で用いられる。

(20) ケガがあってはならないーケガがあってはならぬ（文語的）

(21) 僕はいかないよー俺はいかんぞ（男性語）

(22) け（怪）しからん。知らぬ、存ぜぬでつっぱねる。

この出現頻度が低く、文体的に制限のあるヌ（ン）形のかたちが現代日本語文法を考える上で無視できないのは、語幹助辞マス・mas-u がついた動詞の否定は必ずこのヌ（ン）形の語尾が用いられるからである。ただし、結合母音は -a でなく、-e になる。

(23) 書キマス kak-i φ・mas-u、食べマス tabe-φ・mas-u

書キマセン kak-i φ・mas-en、食べマセン tabe-φ・mas-en

このヌ（ン）はナイの縮約であるという見方がある。書キマセンには\*書キマサナイ kaki-i φ・mas・ana-i、セヌには\*セナイ se-na-i というかたちはなく、ないかたちからは縮約できない。ことから、この見方が妥当でないことがわらう。

## 6.2. 意志形（マイ形）

意志形（マイ形）は、I. 子音語幹動詞には -umai、II. 母音語幹動詞には -mai ないし -rumai をつけ形成する。III グループの動詞は、マイ形形成に当たっては、「来ル」「スル」の語幹末母音は u または i となり、それぞれ -rumai と -mai がつくことになる。「来る」のマイ形には、来マイ ko-mai というかたちも観察されるが、標準語形（正則）からはずれる。

(24) I グループ：書クマイ kak-umai

II グループ：食べマイ tabe-mai、食ベルマイ tabe-rumai、

見マイ mi-mai、見ルマイ mi-rumai

III グループ：来ルマイ ku-rumai、来マイ ki-mai

スルマイ su-rumai、シマイ si-mai

このように II と III では語形が複数あり、意志形（マイ形）にはかたちの「ゆれ」が存在する。

もし、Ⅱの母音語幹動詞からつくられるマイ形が必ずルマイ -rumai となるなら、このかたちは動詞の非過去形に mai を付すという規則で形成されることになる。(rumai と -mai とでゆれることはこのかたちが語幹からつくられる形態にありつつあることを示すのかもしれない)。

ヨウ形が対話的な環境で(かつ話し手と聞き手が行為者となる場合で)は勧誘の意味を表し得るのに対して、マイ形は勧誘の意味では普通用いられない。「一緒に遊ぼう」に対し「一緒に遊ぶまい」は、勧誘の意味では用いられない。用いられるのは意志の意味であるが、それも文語的であり、話しことばでの使用は少ない。

ヨウ形が意志を表すのは、基本的には非対話的な環境(心内発話・独話)で用いられた場合であるが、マイ形による意志表出も、「もう、二度とやるまいと心に誓った」のような心内発話や独話を表す引用の中であれば、しばしば用いられる。

(25) 「二度とすまいと思っていたが、またやってしまった」

(朝日新聞、夕刊、2005年8月13日付)

### 6.2.1. マイ形による推量

動詞のヨウ形が、意志・勧誘を基本的に示すとしても、古形の残存形態のようにして、厳しい文体的制限のもとに、推量の意味を示すことがあることを中崎・城田(2018a)で指摘した。イ形容詞のカロウ形もまた、動詞の否定語幹のナカロウ形も同じく文体的制限のもとに推量の意味を表わし得ることをそれぞれ中崎・城田(2019)と本稿の5.で記した。推量の意味を表すことは基本的に否定の意志を表わすマイ形においても認められる事態で、文語的文体で、マイ形は肯定の推量の意味で用いられる動詞のヨウ形の否定の対として通常用いられる。

(26) 論理上の欠陥はほとんどないと言い切れようー論理上の欠陥はほとんどないとは言い切れまい。

もちろん、話しことばにも現れるが書きことばに現れやすい形であり、女性よりも男性の使用がみられる形である。通常の文体では、書カナイダロウが用いられる。

マイ形は推量の意味において、動詞のヨウ形やイ形容詞のカロウ形、ナカロウ形と同じで、「ダロウ」が表す事態の成立(マイの場合は事態の非存在や非成立)を思考や想像で捉えたものとして表すといったものに近似すると思われる。仁田(2000)は「ダロウ」が「キット」「カナラズ」「マチガイナク」「マサカ」「タブン」「オソラク」「モシカシタラ」「ヒョットシタラ」といった様々な確からしさの度合いを差し出す副詞と共に起ることを示しながら、「ダロウ」は「事態の成立・存在を、不確かさを有するもの・確かさに欠けるものとして、想像・

思考・推論の中に捉えたことを表しているのであって、固有の確からしさの度合いを指し示しているわけではない (p.121)」と述べている。マイ形も「ダロウ」ほどではないが「キット／マサカ／オソラク来るまい」のように様々な副詞と共起することができ、ナカロウ形においても（やや確からしさの度合いの高い副詞との共起の容認度に差はあるように感じられるもの）「キット／マサカ／オソラク来なかつろう」のように同様に共起することができることから、どちらも固有の確からしさの度合いを保持していない形であると考えられる。

### 6.3. 命令形 (ナ形)

否定の命令形 (ナ形) は、I. 子音語幹動詞には -una、II. 母音語幹動詞には -runa をつけ形成する。IIIグループの動詞は、ナ形形成に当たっては、「来ル」の語幹末母音は u、「スル」の語幹末母音は u となり、-runa がつくことになる。

(27) I グループ：書クナ kak-una

II グループ：食ベルナ tabe-run、見ルナ mi-run

III グループ：来ルナ ku-run、スルナ su-run

教育文法上は、非過去形、つまり、辞書形にナ na をつけてつくと教えてさしつかえない。

このナは、学校文法などの文法書で終助詞に分類され、そう記される。しかし、肯定の非過去形の語尾助辞 -(r)u に対する否定の非過去の語尾助辞 -(a)nu、肯定の意志・推量形 (ヨウ形) の語尾助辞 -(y)oo に対する否定の意志・推量形 (マイ形) の語尾助辞 -(u)mai を語尾形の対立として考えるにも関わらず、命令形のみ、-(r)una を肯定の命令形の語尾助辞 -e/-ro/-i に対する語尾形の対立と考えず、-(r)u+na のように終助詞と考えるのは形態論上筋が通らないと考えられる。また「ね」「よ」など他の終助詞が、文の最末尾で用いられ、非常に多義的機能を持つものであるのに対し、命令の否定を一義的に示すものを終助詞とするのは考えにくい。やはり、ナはあきらかに語尾助辞であると思われる。

### 6.4. 中止形 (ナイデ形)

ナクテ形に競合する、否定の語尾形の中止形 (ナイデ形) は、I. 子音語幹動詞には -anaide、II. 母音語幹動詞には -naide をつけ形成する。IIIグループの動詞は、ナイデ形形成に当たっては、「来ル」の語幹末母音は o、「スル」の語幹末母音は i となり、-naide がつくことになる。

(28) I グループ：書カナイデ kak-anaide

II グループ：食バナイデ tabe-naide、見ナイデ mi-naide

III グループ：来ナイデ ko-naide、シナイデ si-naide

### 6.5. 条件形（ネバ形）

ナケレバ形に競合する、否定の語尾形の条件形（ネバ形）は、Ⅰ. 子音語幹動詞には -aneba、Ⅱ. 母音語幹動詞には -neba をつけ形成する。Ⅲグループの動詞は、ネバ形形成に当たっては、「来ル」の語幹末母音は o、「スル」の語幹末母音は e となり、-neba がつくことになる。ネバ形は、書カニヤ[ー]kak・anya[a]、食べニヤ[ー]tabe・nya[a] と縮約されることがある。

- (29) Ⅰグループ：書カネバ kak-aneba  
 Ⅱグループ：食べネバ tabe-neba、見ネバ mi-neba  
 Ⅲグループ：来ネバ ko-neba、セネバ si-neba

ナケレバ形はナラナイ narana-i、イケナイ ikena-i と結びつき、事柄の遂行がなし手の義務としてある（事柄の非実現が許容されない、不可欠である）ことを表わす。ネバ形も同様であるが、書きことばでやや固い感じになる。

- (30) 二日までに仕上ゲナケレバナラナイ siage・na-kereba narana-i  
 二日までに仕上ゲネバナラナイ siage-neba narana-i

### 6.6. 汎用形（連用形、ズ形）

否定の汎用形（連用形、ズ形）は、Ⅰ. 子音語幹動詞には -azu、Ⅱ. 母音語幹動詞には -zu をつけ形成する。Ⅲグループの動詞は、ズ形形成に当たっては、「来ル」の語幹末母音は o、「スル」の語幹末母音は e となり、-zu がつくことになる。

- (31) Ⅰグループ：書カズ kak-azu  
 Ⅱグループ：食べズ tabe-zu、見ズ mi-zu  
 Ⅲグループ：来ズ ko-zu、セズ se-zu

ズ形はナイデ形と競合し、中止め用法で用いられる。

- (32) 一晩中眠ら {ナイデ・ズ} 勉強した。

ズ形は、肯定の汎用形（連用形）が特殊な文体で「春雨やこたつの外へ足を出し」のように文末で用いられる<sup>8</sup>のと同じく、(33) のように文語的文体で、文末でも用いられる。また (34) のようにズ形は肯定の汎用形と同じく、結合要素を介さず語幹助辞（とり得るのはジマイダ zimai(-da)）を直接後接させ、二次語幹形<sup>9</sup>を形成する（意味はするつもりだった

こと、したかったことをしないで終わる)。

(33) 渡辺氏立候補せず。

パンのみにして生きる (もの) にあらず。

(34) 結局あの人には会わずじまいだ。aw-azu・zimai-da

また、ズ形は、それ自身で状詞 (状名詞) となり、述語化詞ダ (中崎・城田2017b 参照) をとって再展 (再活用) する。ダは過去形ではダッタ datta、連体接続形 (連体形) でノ no、副詞形でニ ni に屈折的ともいえる語形変化を行う。

(35) 被疑者は一度も口を開かずだ (ak-azu+da) / 開かずだった (ak-azu+datta)。

一度も口を開かずの (ak-azu+no) 被疑者

被疑者は一度も口を開かずに (ak-azu+ni) 座っていた。

このうち活発に用いられるのがニを持つ副詞形である。「お金を持たずに家をだた」「予算の目処を立てずには許可はできない」「太郎は何も口にせず、次郎はチョコレートを1つだけ食べた」など、「付帯状況」「条件」「並列」といった肯定の汎用形と同じ内容で文末述語にかかることができる。これをズニ形と仮に呼ぶことにするが、かたちの上で、これはズ形の再展形と位置づけておく必要がある。

## 7. 結語母音 a

否定語幹を形成する語幹助詞・ana(-i) の・a は結合母音 (結合要素のうち母音であるものを結合母音と呼ぶ) である。この結合母音である・a は語幹助辞の本体 na を子音語幹に結びつける役をはたしている。この aこそ、学校文法でいう五段活用の未然形のア段の正体である。

・aの結合母音が表示するのは否定語幹を形成する場合だけではない。6. でみてきた動詞(肯定) 語幹から直接つくられる否定の語尾形のうち、意志形 (マイ形) -umai、命令形 (ナ形) -una といった呼び掛けのムードに関わる語尾助辞以外の非過去形 (ヌ形) -anu、中止形 (ナイテ形) -anaide、条件形 (ネバ形) ・-aneba、汎用形 (ズ形) -azuにおいてもこの a は共通して見られる。このことから結合母音 a は、否定の意味を有する語尾助辞を子音語幹に結合させる機能を有しているといえる。子音語幹において a と否定の要素とは相互予定関係にあり、a は否定の要素と呼応する存在といえる。

## 8. 動詞のナイとイ形容詞の否定のかたちの構造上の差異

イ形容詞の否定のかたちは、赤クナイ aka-ku φ・na-i のように形容詞を「汎用形」(連

用形) に立て、ナイ na-i を後続させることでつくられる。これに対して動詞の否定かたちは、動詞の語幹に語幹助辞・ana(-i) / ・na(-i) をつけ拡大することでつくられる。

この2つのナイについて、形容詞の否定をつくるナイが「汎用形」(連用形) とナイの間にとりたて助詞を入れ込むことができ1個の形容詞であるのに対し、動詞のナイ・ana-i / na-i の前にはとりたて助詞を置くことはできず、ナイを含んだかたちで1語であり、両者が異なる存在であることは中崎・城田(2019)で述べた。

ともに、そのまま述語になり得る品詞でありながら、動詞の否定と形容詞の否定はかたちの上では対応的ではない。動詞が持つ語幹の拡大による否定語幹というかたちをイ形容詞は持たないのである。

イ形容詞の否定の構造上の由来をたずねると、イ形容詞の「代行結合(書キハスル kak-i φ wa su-ru のように汎用形にスルを後続させ、とりたて助詞を入れ込んで語幹部を取り立てること)」の否定のかたちに行きつく。動詞の否定とイ形容詞の否定のかたちの構造上の差を図示すると以下の図ようになる。

	肯定	否定
単一形	書ク kak-u	書カナイ kak・ana-i
「代行結合」	書キハスル kak-i φ wa su-ru	書キハシナイ kak-i φ wa si・na-i

動詞の非過去形の肯定と否定

	書カナイ			
	kak	・a	na	-i
かたち	動詞語義語幹 (子音語幹)	語幹助辞		語尾助辞
(形態素)		結合母音	助辞本体 (語幹)	
意味	語義的意味	否定		非過去
形成される単位	否定語幹			語尾
	否定語幹の非過去形(1語)			

動詞の否定(非過去形)

	肯定	否定
単一形	寒イ samu-i	寒クナイ samu-ku( )na-i
「代行結合」	寒ク(ハ)アル samu-ku(wa)ar-u	寒クハナイ samu-ku wa na-i

イ形容詞の非過去形の肯定と否定

	寒クナイ					
	samu	-ku	φ	( )	na	-i
かたち	イ形容詞	語尾助辞		語間間隙	補助形容詞	語尾助辞
(形態素)		語義語幹	結合要素			
意味	語義的意味	補助形容詞等の後続の可能性		すぎま	否定	非過去
形成される単位	イ形容詞の連用形(1語)			すぎま	補助形容詞非過去形(1語)	
	2語の結合					

形容詞の否定(非過去形)



イ形容詞では、「代行結合」の否定がまたイ形容詞の否定として用いられており。この図で明らかであろう。認識しておかなければならないのは、イ形容詞の否定とされるものと、イ形容詞の「代行結合」の否定とにはかたちの上で差がないことである。ここでは、語間間隙（語と語の間のすきま）にとりたて助詞が顕在化するかたち（例 寒クハナイ）を「代行結合」の否定、顕在化しないもの（悪クナイ）をイ形容詞の否定と考えておくことにする。

## 9. ナイの文法上の区別

ナイは na-i という音相、na-katta、na-kute、na-ku…などイ形容詞的語尾変化、および、否定という内容において共通する同一の形態素といえる。しかし、文法上、少なくとも、以下の4つのナイを区別しておく必要がある。

- ① 動詞アルの否定の対である独立する形容詞ナイ  
：本がアル - 本がナイ（動詞の否定が形容詞であることに注目したい）。
- ② 形容詞・名詞の否定を行う補助形容詞ナイ（形容詞・名詞は「連用形」）  
：赤クナイ aka-ku na-i、静カデナイ sizuka-de na-i  
男デナイ otoko de na-i
- ③ 動詞の否定語幹の非過去形：書カナイ kak・ana-i
- ④ 語形成要素としてのナイ（形容詞を形成する造語要素）  
：ハシタナイ、セワシナイ、切ナイ

## 10. まとめ

これまで、動詞を中心にし、動詞と形容詞の否定のかたちについて、単語として文中でとる語形、そのつくりかた、意味・用法について検討してきた。最後に、動詞の否定のかたちの語尾変化について表にまとめておく

## 11. 参考文献

- 安達太郎（2002）「意志・勧誘のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 城田 俊（1998）『日本語形態論』ひつじ書房
- 高橋太郎（2005）『日本語の文法』ひつじ書房
- 中崎崇・城田俊（2017a）「日本語における語の構成をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実表現文化』、第11号、pp.1-13、就実表現文化学会
- 中崎崇・城田俊（2017b）「日本語における語の認定と品詞分類をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第46号、pp.63-76、就実大学就実短期大学
- 中崎崇・城田俊（2018a）「日本語における動詞のヨウ形・汎用形（連用形）・連体形の意味

用法をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－』『就実表現文化』、第12号、pp.62-45、就実表現文化学会

中崎崇・城田俊（2018b）「日本語における動詞の語形とその作り方をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第47号、pp.39-55、就実大学就実短期大学

中崎崇・城田俊（2019）「日本語における形容詞の語形とその作り方をめぐって－日本語教師のための日本語文法をもとめて－」『就実論叢』、第48号、pp.43-61、就実大学就実短期大学

仁田義雄（2000）「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店

否定語幹の語尾形	完結形				接續形				汎用形 (連用形)	
	非過去形	過去形	呼び掛け形	命令形	中止形	条件形	前提形	逆接形		例示形
肯定語幹の語尾形	借さない	借さなかった	借すまい	借すな	借さなくて	借さなければ	借さなかったら	借さなくて	借さなかったり	借さなく
否定語幹の語尾形	kas・ana-i	kas・ana-katta	kas-umai	kas-una	kas-anai	kas-aneba	kas・ana-kattara	kas・ana-kutate	kas・ana-kattari	kas・ana-ku
肯定語幹の語尾形	勝たぬ	勝たなかった	勝つまい	勝つな	勝たなくて	勝たなければ	勝たなかったら	勝たなくて	勝たなかったり	勝たなく
否定語幹の語尾形	kat・ana-i	kat・ana-katta	kat-umai	kat-una	kat-anai	kat-aneba	kat・ana-kattara	kat・ana-kutate	kat・ana-kattari	kat・ana-ku
肯定語幹の語尾形	刈らぬ	刈らなかった	刈るまい	刈るな	刈らなくて	刈らなければ	刈らなかったら	刈らなくて	刈らなかったり	刈らなく
否定語幹の語尾形	kar・ana-i	kar・ana-katta	kar-umai	kar-una	kar-anai	kar-aneba	kar・ana-kattara	kar・ana-kutate	kar・ana-kattari	kar・ana-ku
肯定語幹の語尾形	買わぬ	買わなかった	買うまい	買うな	買わなくて	買わなければ	買わなかったら	買わなくて	買わなかったり	買わなく
否定語幹の語尾形	kaw・ana-i	kaw・ana-katta	kaw-umai	kaw-una	kaw-anai	kaw-aneba	kaw・ana-kattara	kaw・ana-kutate	kaw・ana-kattari	kaw・ana-ku
肯定語幹の語尾形	飛ばぬ	飛ばなかった	飛ばまい	飛ばな	飛ばなくて	飛ばなければ	飛ばなかったら	飛ばなくて	飛ばなかったり	飛ばなく
否定語幹の語尾形	ka-ana-i	ka-ana-katta	ka-umai	ka-una	ka-anai	ka-aneba	ka・ana-kattara	ka・ana-kutate	ka・ana-kattari	ka-ana-ku
肯定語幹の語尾形	嘔まぬ	嘔まなかった	嘔ぶまい	嘔ぶな	嘔まなくて	嘔まなければ	嘔まなかったら	嘔まなくて	嘔まなかったり	嘔まなく
否定語幹の語尾形	ka-ana-i	ka-ana-katta	ka-umai	ka-una	ka-anai	ka-aneba	ka・ana-kattara	ka・ana-kutate	ka・ana-kattari	ka-ana-ku
肯定語幹の語尾形	書かぬ	書かなかった	書くまい	書くな	書かなくて	書かなければ	書かなかったら	書かなくて	書かなかったり	書かなく
否定語幹の語尾形	kak・ana-i	kak・ana-katta	kak-umai	kak-una	kak-anai	kak-aneba	kak・ana-kattara	kak・ana-kutate	kak・ana-kattari	kak・ana-ku
肯定語幹の語尾形	唄がぬ	唄がなかった	唄ぐまい	唄ぐな	唄がなくて	唄がなければ	唄がなかったら	唄がなくて	唄がなかったり	唄がなく
否定語幹の語尾形	kag・ana-i	kag・ana-katta	kag-umai	kag-una	kag-anai	kag-aneba	kag・ana-kattara	kag・ana-kutate	kag・ana-kattari	kag・ana-ku
肯定語幹の語尾形	たべぬ	たべなかった	たべ(る)まい	たべるな	たべなくて	たべなければ	たべなかったら	たべなくて	たべなかったり	たべなく
否定語幹の語尾形	tabe・na-i	tabe・na-katta	tabe-(ru)mai	tabe-runa	tabe-anai	tabe-aneba	tabe・na-kattara	tabe・na-kutate	tabe・na-kattari	tabe・na-ku
肯定語幹の語尾形	見ぬ	見なかった	見(る)まい	見るな	見なくて	見なければ	見なかったら	見なくて	見なかったり	見なく
否定語幹の語尾形	mi・na-i	mi・na-katta	mi-(ru)mai	mi-runa	mi-anai	mi-aneba	mi・na-kattara	mi・na-kutate	mi・na-kattari	mi・na-ku
肯定語幹の語尾形	来ぬ	来なかった	来(る)まい	来るな	来なくて	来なければ	来なかったら	来なくて	来なかったり	来なく
否定語幹の語尾形	ko・na-i	ko・na-katta	ko-rumai	ko-runa	ko-anai	ko-aneba	ko・na-kattara	ko・na-kutate	ko・na-kattari	ko・na-ku
肯定語幹の語尾形	来ぬ	来なかった	来(る)まい	来るな	来なくて	来なければ	来なかったら	来なくて	来なかったり	来なく
否定語幹の語尾形	ko-nu	ko-nu-katta	ku-rumai	ku-runa	ko-anai	ko-aneba	ko・na-kattara	ko・na-kutate	ko・na-kattari	ko・na-ku
肯定語幹の語尾形	しぬ	しなかった	するまい(すまい)	するな	しなくて	しなければ	しなかったら	しなくて	しなかったり	しなく
否定語幹の語尾形	si・na-i	si・ana-katta	su-rumai	suruna	si-anai	se-neba	si・na-kattara	si・na-kutate	si・na-kattari	si・na-ku
肯定語幹の語尾形	せぬ	せなかった	するまい(すまい)	するな	しなくて	せねば	せなかったら	しなくて	せなかったり	せず
否定語幹の語尾形	se-nu	se-nu-katta	su-rumai	suruna	si-anai	se-neba	se-nea	se-nea	se-nea	se-zu

動詞の否定のかたちの語尾変化

否定(ナイ)語幹の語尾変化と否定語尾による語尾変化

---

<sup>1</sup> 本稿での日本語教育とは、日本語非母語話者に対する日本語教育に限らない。日本語母語話者に対する、いわゆる国語教育も含む。以後断らない限り、この意で日本語教育という用語を用いる。また日本語教師についても、非母語話者、母語話者に対する日本語教育を行うものといった意味で用いる。

<sup>2</sup> 語幹助辞については中崎・城田（2017b）の5.2.1.2.などを参照されたい。

<sup>3</sup> ・は語幹と語幹の境目を示す。例えば、kak・ana-iと表記された場合、kak・は書くという動詞の語義を担う語幹（語義語幹と呼ぶ）であり、・ana-はそれを拡大して、否定語幹を形成する語幹助辞であり、-iは形容詞性の語尾である。

<sup>4</sup> Ⅲグループのクル、スルは本質的にはともに母音語幹動詞であるが、その母音はsita「した」、suru「する」、seyo「せよ」、kita「来た」、kuru「来る」、koi「来い」のように変化し、その母音は[i~u~e]、[i~u~o]のように特定されていないものである。

<sup>5</sup> 来ルの否定（ナイ）語幹に来ナ（イ）ki・na(-i)があるが、標準語形（正則）からはずれる。

<sup>6</sup> イ形容詞の語形とつくり方については中崎・城田（2019）を参照されたい。

<sup>7</sup> 結合形とは語尾形の1つと補助動詞との結合によって形成される文法形態である。「書キハスル」のような汎用形と補助動詞との結合と、「書イテイル」のように書いてkai-teのような接続形と補助動詞との結合の2つがある。

<sup>8</sup> 詳しくは中崎・城田（2018a）の3.1.11.を参照されたい。

<sup>9</sup> 肯定の汎用形の二次語幹形については中崎・城田（2018a）の3.2.を参照されたい。

